

ドイツと日本をつなぐ月別「人・こと・もの」

シニア派遣 藤本 浩行

(令和3年度派遣 ドイツ デュッセルドルフ日本人学校)

はじめに 3K(関心、感動、感謝)を合言葉に

昨年度は中学部で社会科と中学2年の副担任でしたが、本年度は小学部4年担任となりました、私のめざしているものが、「学びの日常化」ですので、授業と学級づくりを一体として実践できることは、まさに水を得た魚のごとく、やりたいことが次々に湧いてきました。さらに小学4年の社会科は地域教材であり、社会科副読本の改訂作業の準備や現地理解教育を推進していく意味でも絶好のポジションです。

社会科学習のキーワードとして、「人・こと・もの」と言われていますが、身の回りの興味・関心から「学びの輪」を広げて、感動のある教育実践をめざし、いろいろなことに感謝することができる子どもたちを育てていきたいと新年度に誓いました。

4月 私が貸した教科書が美術館に展示

昨年度末、ケルンの美術館から学校に、「フェリーチェ・ベアトという写真家の特別展をやるので、日本の中学校社会科歴史教科書(東京書籍)を貸してほしい」という依頼がありました。写真家の名前は聞いたことがありませんが、幕末の下関砲台占領を写した見覚えのあるものでした。

調べてみると、彼はイタリア生まれのイギリスの写真家で、幕末に日本にやって来て、日本各地を回って日本の文化、風土などの写真を残している人物であることを知りました。私は、教科書を個人用として購入しているので、二つ返事で快諾しました。

4月にお礼として、この美術館から招待券が届きました。世界遺産であるケルン大聖堂の隣にある立派なルートヴィヒ美術館でした。しかも、事前に訪問の日時を知らせてもらえば、館内を案内していただけるというVIP待遇でした。私は、ドイツ語を通訳してくださるS先生や後任の中学社会科担当の先生、妻と連れ立って行きました。

ドイツで、郷土山口にゆかりのある写真に出会うことができ、感激しました。帰国したら下関砲台の占領の場所を訪問していろいろなことを調べてみたいと思います。



《下関砲台の占領教科書展示》

5月 日本デー

デュッセルドルフの「日本デー」は、2002年に始まり今では日本文化を発信する最大の場となっています。コロナ感染防止規制が緩和されつつあり、例年に近い形で実施されました。ドイツ国内はもとより、ヨーロッパ各国からも観光客が押し寄せてくる一大行事の一つになっています。その数は、約60万人ということです。これは、デュッセルドルフ市の人口に匹敵するものです。日本人学校では、合唱クラブ、ウインドアンサンブルクラブがステージイベントに出演しました。



《日本デー日本人学校合唱部》

会場となるライン川沿いには、日本文化関連の飲食店やいろいろなブースで賑わいました。私は、平素お世話になっている日本クラブの折り紙コーナーのテント設営ボランティアとして働きました。妻は、日本クラブの邦楽同好会で、琴の発表会のステージイベントの手伝いをしました。日本デーのフィナーレは、花火が盛大に打ち上げられます。日本から花火師が招かれ、打ち上げ花火が披露されるそれは見事なものでした。花火が終わり、隣にいた見ず知らずの外国人から、「ニホン アリガトウ」という声をかけられ感激しました。

6月 運動会で「花笠音頭」を披露

本年度は、3年ぶりとなる対面での運動会の開催です。3・4年生は、元気一杯な子どもたちのよさを引き出すために「花笠音頭」に取り組むことになりました。「花笠音頭」は、本校では今まで一度も運動会で披露されていないようです。音源は入手できるものの、肝心の傘や花紙の入手が困難なのです。日本では、教材店に注文すれば花笠セットが届くのですが、時間とお金がかかります。しかも、運動会は補習校と一緒に開催です。

そこで、現地で花笠作りの材料を調達することにしました。私は、いろいろな店を回りました。花笠の傘としたのは、植木鉢の鉢受トレイに目をつけました。直径30cmの大きさで、価格は1.95ユーロでした。花作りの紙も日本製では高価なので、美術科の先生に相談し、現地で手に入る紙が入手可能となりました。その結果、一人あたり約3ユーロで花笠を作ることができました。



《運動会 3・4年生「花笠音頭」》

土曜日だけの授業しかない補習校の花笠作りはオンラインで教えることができ、日本人学校と補習校との交流の輪が広がりました。

花笠は、3年生がドイツ国旗、4年生が日本国旗をイメージした配色にしたものでした。運動会当日、「やっしょうまかしょ！ 3・4年！」という元気一杯の掛け声が運動場に響き渡り、日本の伝統文化を発信でき盛大な拍手をいただきました。

7月 算数科「小数」の教材開発

今までの教師生活では教材づくりに力を入れてきました。ここドイツにいる子どもたちにとって生活に密着した4年小数の教材を紹介します。4年算数科では、小数第二位まで学習します。日頃よく目にするドイツのスーパーマーケットの広告を提示しました。

ドイツでは、ユーロとセントの2つの通貨単位を使用します。2ユーロ23セントのお菓子は、2.23ユーロと表記されます。「3ユーロ出しました。おつりはいくらでしょうか」という生活に密着した問題作りを行うことができます。ちなみに、ドイツではカード決済が進んでいますが、根強い現金志向があり、ある調査では国民の約6割が現金でのやり取りを望んでいるといわれています。



《わり算でタイル教材の活用》

また、算数の教材づくりをするにあたり、本校の資料室でタイル教材を大量に見つけ、強い味方になりました。私は、新卒のとき算数科の研究会で「水道方式」という指導に出合いタイルを使った実践をしてきました。四則計算でも分数や小数でも活用できます。小数で言えば、1 0.1 0.01 が量感覚をもって理解できます。

8月 「9ユーロチケット」の恩恵にあやかりドイツ国内を旅行

ドイツではエネルギー価格高騰対策、二酸化炭素排出量の抑制などの理由で6・7・8月の3ヶ月間限定で高速鉄道（日本の新幹線）以外のすべての公共交通機関が1ヶ月9ユーロで乗り放題という驚くべき政策を打ち出しました。日本での「青春18きっぷ」よりすごい「9ユーロチケット」です。「ドイツという国は、短期間で思い切ったことをやる国だなあ」と感心しました。

私はこの恩恵を受け、ドイツ国内の都市を可能な限り旅行して回りました。本校の各学年が訪れる遠足や社会見学、宿泊学習や修学旅行の下見を兼ねたり、社会科副読本の改訂作業の下見に行ったりして来ました。

ドイツにも、鍾乳洞が点在しているそうです。デュッセルドルフから電車で約1時間のところにある Dechenhöhle という鍾乳洞にも行きました。昨年度、本校の中学年が遠足で訪問したところです。秋芳洞、大正洞、景清洞などを懐かしく思い出しました。

毎年、本校の6年生が平和学習で訪問するドイツ国際平和村への見学は、本校の図書館司書教諭のT先生のお知り合いが勤務されていることもあり、施設内を案内してお話を聞くことができました。

また、グリム童話にゆかりのある「ブレーメン」「ハーメルン」などという街歩きというテーマ性を大切にしました。「バーデンバーデン」という温泉地にも行って来ました。ちなみに、周南市に勤務していたとき「バーデンハウス三丘」という温泉がありましたが「バーデン」というのは、ドイツ語で温泉」という意味であったことわかり納得しました。

もう一つ、ドイツ国内 Schönblick で「ヨーロッパ・キリスト者の集い」に参加したことです。39 回目を迎えヨーロッパ国内から集うキリスト教の夏季研修会です。ノンクリスチャンの私たちも温かく受け入れてくれました。デュッセルドルフでの生活が、充実しているのはデュッセルドルフ日本語教会での牧師のヘーゲレ先生をはじめ、教会に集う人たちとの出会いを抜きに考えることはできません。

夏季休暇ですので、見聞を広めるために鉄道だけでスイス、フランス、イギリス旅行にも行って来ました、ダメもとでロンドン大学を訪問し、中庭に長州ファイブの石碑を見つけ感激しました。帰国したら光市にある伊藤公記念館にもう一度行きたくなりました。

旅行をするときには、周防大島の宮本常一氏が父から教わったという「旅十か条」を心がけるようにしています。その土地のできるだけ高い所に上って、全景を眺めたり、そこに住んでいる人たちに少しでもふれていくことを心掛けたりするようにしています。市場に出向き、その土地ならではの食べ物をいただくことは何よりも幸せな気持ちにさせてくれます。



《長州ファイブの石碑》

9月 卓球の「出前授業」を企画運営

私は今までの教師生活で、「地域は大きな学校」「子どもたちに本物との出会いを！」ということを掲げて、外部人材との出会いを積極的に推進してきました。コミュニティ・スクールに取り組むようになってから拍車がかかりました。

私は学生時代、社会人になってからも卓球をやっています。ドイツの公園では卓球台をよく見かけます。国内の卓球リーグもあり、卓球は人気のスポーツです。デュッセルドルフのプロの卓球チームはドイツ国内でも上位のチームです。

知人を介して、現地の卓球メーカーのバタフライにお勤めの梅村礼様と知り合いになりました。彼女は全日本選手権シングルを2回制覇し、アテネオリンピックにも出場されたすごい経歴をおもちの方で、日本人学校に講演に来られたことがあるそうです。私が山口県出身であり、バタフライの創業者が柳井出身であることから、親近感をもたれ、日本人学校への卓球の外部人材派遣がトントン拍子に進みました。

タイムリーにもドイツのブンデスリーグという国内リーグで活躍されている坪井勇磨選手にデュッセルドルフ日本人学校に来校していただき、「夢に向かって」という演題で実技を交えて、4・5・6年生に話をさせていただきました。



《坪井選手の卓球出前授業》

蛇足ながら、日本卓球界を牽引している水谷隼選手は、青森山田中学在籍時に、デュッセルドルフに卓球留学して、3部、2部、ロシアリーグに参戦して腕を磨いたということです。TOKYOオリンピック後の水谷選手へのあるインタビューでは、「日本選手は、どんどん海外に出て武者修行をする必要がある」と述べていました。

10月 「AWISTA」というドイツのごみ処理場の見学

コロナ感染防止のため延期になっていたAWISTAというごみ処理場の見学に行くことができました。この施設は半官半民の施設です。日本では、何度か社会見学で貸し切りバスを利用してごみ処理場を利用してきました。通訳をしてくださるS先生と、一緒に担任している30人の子どもたちをUバーンという電車で引率するので入念な下見を行いました。タイムリーにも見学先のAWISTAで一般市民へのオープンデーがあり、下見を兼ね見学ができて、ドイツでの環境問題を学ぶきっかけになりました。

見学当日に、ドイツのごみ処理や、焼却時の熱を利用することなどのお話を聞くことができました。AWISTAではいろいろなごみ処理の車を見せていただくことができ、私たちの興味を引きました。中でも、右ハンドルのごみ収集車には驚きでした。路側帯のごみを点検しやすいように日本と同じ右ハンドルであるということです。後日、街中で右ハンドルのごみ清掃車を見て、感激しました。



《AWISTA ごみ処理場の見学》

後日、アイスホッケーの試合観戦で、試合の合間にAWISTAの清掃車が、氷上をきれいにしているのには、笑いました。

11月 カタールW杯2022で、日本対ドイツ戦

11月は何と言ってもカタールW杯日本対ドイツ戦です。日本とドイツが同じグループで初戦を戦うとあって大きな盛り上がりを見せていました。

実は、9月23日と27日にもサッカー日本代表の最終調整として、ここデュッセルドルフでアメリカ戦とエクアドル戦が行われ、本校からエスコートキッズやベヤラーの依頼があり、学校を挙げて応援に行きました。日本でも中継されるとあって、徐々に盛り上がりを見せていました。



《地元の試合に招待》

いよいよW杯当日の日本対ドイツ戦です。私たちは放課後、学校長の許可を得て現地のテレビ放送と、ネットを駆使して日本語放送の同時中継で応援しました。とは言っても、日本の放送の方が数分遅くなりましたが。現地採用のドイツ語がわかる教員が、「日本の放送は、解説者がしゃべり過ぎ！」という言葉に、納得しました。

ご承知のように、W杯予選リーグでは、強豪ドイツ相手に歴史的な勝利をおさめることができました。日本の中学校でサッカー部担当のS教員は、日本人の精神性やチームプレーを大切にしていることを熱く語ってくれました。

「もし、日本がドイツに勝ったら暴動が起きるのではないか」という人もいましたが、知り合いのドイツ人は「そんなことをドイツ人はしません」とさりと切り切っていました。実際に、暴動は起きず、「ドイツと日本が一緒に、決勝トーナメントに行こう」という建設的な意見を聞きました。

身近なものから、おもしろい教材はないかと常に探している私は、サッカーでの観客数「54145人」という入場者数で4年算数科「約何万人の入場者数ですか？」という概数の問題ができること、日本が敗れたコスタリカの「幸福度指数」「軍隊を持たない国」ということに関心があり、W杯をとおして学習を広げたり深めたりすることに興味・関心がありました。

12月 補習校合同研修会

文部科学省から派遣された教員は、1年に1回補習校支援の研修会が義務付けられています。昨年度は、コロナ感染防止から実施されませんでした。本年度は実施できました。私は、4年国語科「短歌と俳句」の授業を補習校の2学級で授業することになりました。補習校の先生方は、物語文「プラタナスの木」の授業を公開してくださり、一緒に研修することになりました。



《「短歌と俳句」の拙授業》

3、4年生は6月の運動会の「花笠音頭」を補習校と一緒に行ったので、準備や踊りなどを通して交流をしていたので打ち合わせもスムーズにできました。補習校の先生方は、土曜日の午後から4時間、年間35週という限られた中で、綿密な計画と準備の中で、実践されていることを知り、頭の下がる思いでした。

全日制の学級と同じ教室で補習校の子どもたちも学習しているので、毎回土曜日には、国語の作品や国語関係の掲示物で間接交流を実施することにしました。これが好評で、他学級

にも実践が広がっていきました。海外の日本人学校と現地校との交流で、最も大切にしなければいけないことは、補習校との交流であることを確認することができました。

1月 現地校との交流会

コロナ感染防止も徐々に緩和され、フランチファーゼンという現地校との交流学習を実施することになりました。4年生はお手玉、あやとり、めんこ、竹とんぼ、将棋などの昔遊びを通じたふれあい学習です。運動会での表現運動「花笠音頭」も披露することになりました。実行委員を中心に各学級で話し合い、外国語活動や総合的な学習の時間（ドイツ文化理解）で、事前に準備を行いました。

この機会に学級でも遊び文化として、日本遊びが日本人学校にも流行したことは喜ばしいことでした。中でも、ドイツはビールのコースターが簡単に手に入るので、めんこのようにして遊んでいました。日本人学校の存在意義は、現地の学校との交流による現地理解教育を抜きにしては語れません。



《折り紙での交流の様子》

4年生は学習発表会で「二分の一成人式」に取り組みましたが、ドイツでの成人の考え方を学ぶきっかけになりました。つまり、現地理解教育を取り入れたカリキュラムを推進していくことが、日本人学校には求められていると思います。

もう一つ、実践したことは4年国語科で「ごんぎつね」を学習しましたが、ドイツのグリム童話との比較関連で、学習を進めてブックトークをしました。このように、日本人学校では単に日本のカリキュラムを進めるのではなく、現地の実情を生かした教育活動を展開していくことが求められています。直接交流だけではなく、間接交流もいつも心掛けていきたいものです。

2月 「カーニバル」

11月から2月・3月にかけて、デュッセルドルフ市周辺ではカーニバルの期間になります。カーニバルは盛大なお祭りで、ドイツ文化・地域理解を深める最大のチャンスです。

本校では、小学部2年生が仮装して現地校と交流したり、有志の教員がパレードに参加したりします。恥ずかしながら、カーニバルは単なるハローウインのような仮装という表面的な理解でしたが、ドイツ文化に基づく奥が深いものがあることを知りました。実際に、総合的な学習の時間（ドイツ文化理解）でも、計画的に学習します。



《カーニバルの様子》

昨年度のコロナ感染防止の規制があったときでさえ、縮小して「カーニバル」は行われました。私は、着物とかつらで武士に変装し、幕末の社会科の授業を行いました。

本年度は、2年生の保護者がカーニバル担当として4月から準備をしています。2年生の学年テーマが「にじ」ですので、日本らしさを演出する時代劇と組み合わせたものです。明るく元気な2年生と有志の教員が忍者に仮装して市内を「ヘラウ！」と叫びながら大量のお菓子をばらまきながらパレードする予定です。

3月 花見桜、ライン川沿いのクロッカスの花が見事

ドイツでも3月になると、花々が咲き始めます。桜の花もあちらこちらにあります。日本人学校では、岸田総理大臣が、外務大臣時代にデュッセルドルフに立ち寄られ、植樹されたものが花を咲かせます。

花見と言えば、戸外で食事をする楽しさがあります。ドイツの公園には備え付けのバーベキューサイトがあり、外での食事を楽しんでいます。施設の利用は無料の所がほとんどです。

私は、冬場以外は毎月のように「一品持ち寄り」の食事会を企画し、いろいろな方とふれあってきました。食は、人と人を結びつけるものです。

お好み焼きやたこ焼き、餃子などでおもてなししてきました。ドイツの学校の保護者会では、各自がケーキなどのお菓子をもち寄って食事をしながら話をするそうです。ドイツでは外で新鮮な空気を吸いながら食事を楽しんでいます。レストランでも外の席から埋まります。



《日本人学校の桜の苗木》

私は日本にいるときから、「子ども食堂」に関心をもち、手伝いをしてきました。ドイツにやってきてから、食が人とのつながりを強める手段であることを再認識しました。デュッセルドルフ日本人学校と姉妹校の職員との交流では、一品持ち寄りが恒例になっていて、日本食とドイツ食のコラボの楽しい会になっています。「そうめん流し」「たこ焼き」「お寿司」などの日本料理が人気です。

そもそも集い合っただけで会食することは相手を信用していることであり、食文化をとおして人間関係が広がり深まっていくものです。自分が今まで大切にしていたことが、ドイツに来てからも通用するものであることを確信しました。

おわりに 志を新たに

この拙稿を書いているのは、原稿締切りの1月末です。したがって、2月・3月のものは予定されているもので、写真は昨年度までのものです。今回、「ドイツと日本をつなぐ人、こと、もの」というテーマで、月ごとにまとめることによって今までバラバラであったものが、つながってきて新たなものが見えてきました。いずれのものからも、ドイツや日本文化の理解につながるものです。

11月末、学校の近くの教会で全校児童生徒を対象に音楽鑑賞会が行われました。パイプオルガンの響きや歌に感激しました。プログラムに「ふるさと」の全員合唱がありました。歌詞の「志を果たしていつの日にか帰らん」 このフレーズを歌うとき、熱いものがこみあげてきました。派遣教員としての自らの志は何であるかと自問してみました。拙稿を書きながら、日本人学校で勤務する意味を再認識する場となり、感謝しています。